

茶の湯文化学会会報

No.97

第97号 / 2018年6月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

州徳川家においては、こうした施設がない。その理由は、昭和二年（一九二七）、同年（一九三三）、同九年（一九三四）の三回に渡って、所蔵品が売却されたからである。所蔵道具を書き上げた、いわゆ



写真の和歌山城は、弘化3年に落雷焼失後、嘉永3年に再建したもの。現在の和歌山城は、戦後の再建。
(和歌山市紀国堂溝端佳則氏所蔵絵葉書)

茶道具の展覧会で、解説に「紀州徳川家伝来」と、書かれているものを見かけたことはないだろうか。紀州徳川家といえば、御三家のひとつとして八代將軍吉宗・十四代將軍家茂という二人の將軍を輩出したことで知られている。御三家のこの二つは尾張徳川家と水戸徳川家であるが、それぞれ徳川美術館、徳川ミュージアムが設立され、茶道具をはじめとした伝来の所蔵品を展示・保管している。ところが、紀

紀州徳川家伝来の茶道具

砂川佳子

る蔵帳などの藩政史料についても、戦災等により、その多くが失われ、現在伝わるのは、ごく一部に過ぎない。

そのため、紀州徳川家伝来の茶道具の全容を知るよすがは、売却にあたって作成された売立目録のみである。明治後期から昭和初期にかけて、財政的に行き詰ったりするなどした旧大名家らが、伝来の道具を一斉に売却するために、売立、つまり入札会がおこなわれたのである。この時、実物を下見することができない人々に配布するため、『紀州徳川家蔵品展観目録』が作成された。



『紀州徳川家蔵品展観目録』
東京美術倶楽部 昭和2年
(和歌山県立文書館所蔵)

紀州徳川家は、徳川家康の十男頼宣が、元和五年（一六一九）に紀伊国和歌山五万五千石へ転封されたことにはじまる。以後、十四代茂承の時に明治維新を迎えるまで続いた。

その間、代々の藩主はそれぞれ茶の湯に關わってきた。なかでも、初代藩主頼宣、十代治宝、十一代斉順は、紀州徳川家で所蔵する茶道具の収集や伝来に、大きな役割を果たしたことから、この三人の藩主と茶道具との關係を紹介したい。

紀州徳川家初代藩主頼宣は、慶長七年（一六〇二）伏見で生まれた。翌年、常陸水戸藩二〇万石、同十四年（一六〇九）には駿河・遠江五〇万石へ転封された。慶長十九年（一六一四）、大阪冬の陣に参戦した。元和五年に紀州へ入国し、安藤・水野の付家老に支えられながら、よく治めた。寛文七年（一六七七）に隠居し、同十一年（一六七二）に没している。

茶の湯の作法については、数寄屋御成に対応するため、それなりに身に付けていたと推定される。道具については、元和二年（一六一六）家康が没すると、形見分け「駿府御分物」が行われ、その際、多くの掛軸や

茶道具などが紀州徳川家にも入ったと推定される。売立目録から「駿府御分物」は、十五点確認できる。うち六点が掛軸で、残り九点が茶道具である。織部の茶杓以外は、のちに松平不昧によって、大名物、名物に格付けされる優品であった。

表1 紀州徳川家伝来「駿府御分物」

番号	特記事項	伝来	作者	名称
1	東山御物	駿河御分物ノ内	牧溪	江天暮雪図
2	東山御物	駿河御分物ノ内	牧溪	老子図 一名「鼻毛老子」、 「牧溪」並ニ「道祐」在印
9	柳堂御物	駿河御分物ノ内	一休和尚	詩歌
13	東山御物	駿河御分物ノ内	顔輝ノ牧溪	中醋吸三聖図ノ左右太公望普説図
15		駿河御分物ノ内	兆殿司	観音図
44		駿河御分物ノ内	趙子昂	王維詩「桃源一去絶風塵」
113	大名物	「東照公平常御所用南龍公へ御譲駿河御分物ノ内」		へらめ肩衝
120	名物	駿河御分物ノ内		灰被天目
135	名物	駿河御分物ノ内		虫喰茶杓
142		駿河御分物ノ内	織部	茶杓
167	名物	駿河御分物ノ内		尼崎台
168	名物	駿河御分物ノ内		つぶ桐蓋
169	名物	駿河御分物ノ内		せめひも蓋
208	名物	駿河御分物ノ内		そるり古銅花入
②27	名物	松永弾正 徳川家康 駿府御分物として紀伊頼宣卿に		落葉茶壺 黄茶釉

こうした数寄屋御成の受入・随行や道具の管理の必要もあってか、寛永十七年（一六四〇）、幕府御数寄屋頭の親類であろう中野栄雲を召出し、寛永十九年（一六四二）には、千宗左（初代江岑）を迎えている。この時、千家から藩主頼宣に献上したのが、紹鴎作茶杓銘「あさち」と、利休所持の水瀧（建水）銘「大脇差」である。「あさち」は現在個人蔵、「大脇差（指）」は湯水美術館の所蔵となっている。どちらも昭和二年の第一回売立で入札に掛けられた。



『紀州家中系譜並に親類書上げ 上』（資料番号 7568）
和歌山県立文書館 2011年



『紀州徳川家蔵品展覧目録』より
「紹陽作茶杓銘」あさ地

頼宣自身が、どの程度茶の湯を嗜んだかは判然としないが、家臣に対しては、「少に而も可学茶道を不知は他行馳走のもてなしには先ツ茶の湯なりそれを不知は不骨にてさながら下臈立にて見ゆる」(『南紀徳川史』第一冊)と語っている。つまり、少しでも茶の湯を学ぶべきであり、茶道について知らなければ、外出した先でのもてなし、まずは茶の湯であるが、それを知らなければ、まるで下人のような身分の低い者に見える、とし、武士の教養として認識していた様子がうかがえよう。

「駿府御分物」に代表されるように、初代藩主頼宣の時代から、紀州徳川家では、掛軸・茶道具はもちろん、刀剣や美術工芸品等のコレクションの集積がはじまった。以後、将軍家からの拝領品や歴代藩主による収集がおこなわれ、ますますその内容は、充実していく

こととなる。

十代藩主治宝は、明和八年(一七七二)に誕生した。寛政元年(一七八九)藩主となり、幕府の寛政改革に倣って、紀州藩でも行財政改革に着手している。文政七年(一八二四)養子斉順に代を譲って隠居するも、嘉永五年(一八五二)に没するまで、藩政の実権を握っていた。

治宝の治世は、文化・文政期に重なったこともあり、書や絵画、それに雅楽の習得と楽器の収集を行うなど、文化的事業にはみずから積極的に取り組んでいる。なかでも茶の湯は、家臣である千宗左(九代了々斎)から皆伝を受け、のちに十代吸江斎へ「返り伝授」したほどであった。

売立目録には、了々斎と吸江斎によって箱書されている茶道具が多く見受けられる。御数寄屋頭の業務か、家元として受注したのかは判断できないが、治宝の指示で改められたり、外箱が加えられたりしたのであろう。ただし、「駿府御分物」の茶道具に、表千家当主による箱書の追加はない。

治宝は、伝来の道具を大事にするだけでなく、自身の手で焼物を制作することを好んだ。文政二年(一八一九)、別邸西浜御殿に初め

て訪れた治宝は、以後窯や作業場などの設備を充実させ、楽吉左衛門(旦入)や西村善五郎(永楽保全)を招いて、御庭焼を焼かせている。ほかにも、紀州藩領内に築かれた民間の窯へ好みの焼物を焼かせ、経営にも藩が関わるなどした。

こうして焼きあがった御庭焼は、治宝寵臣や西浜御殿勤めの藩士などに下賜され、民間で作られた大量の陶磁器は、褒美として家臣に与えられている。紀州藩の蔵には、日用品や贈答品としてストックされていた陶磁器が大量にあったと考えられ、売立目録には写真が掲載されていない陶磁器も多い。そのため、目録記載の品物と現在伝わる品物が、同定できない場合も多々あり、紀州徳川家伝来所蔵品の全容解明を阻む要因となっている。



『紀州徳川家蔵品展覧目録』より
御庭焼各種

治宝の跡を継いだ斉順は、享和元年（一八〇二）十一代將軍家齊の子として生まれた。文化十三年（一八一六）治宝の娘豊姫と婚姻し、紀州家へ入る。文政七年に家督を相続し、弘化三年（二八四六）に没している。斉順の藩主時代は、治宝の影響下にあったために、斉順独自の政策は実行できなかつたと言われている。表千家茶道を極めた治宝と違って、斉順はみずから茶の湯点前を習得した様子はない。文化的事業についても、治宝のそれとは規模や内容で劣るが、斉順も且入を招いて御庭焼を行い、吸江斎が箱書を認めている。

斉順は、藩主でありながら和歌山城を離れ、別邸湊御殿を構えた。和歌山の湊御殿の陶器制作場を「清寧軒」と称したが、江戸の紀州藩邸にも窯があり、どちらでつくられた焼き物にも「清寧軒」の印が押されている。茶の湯点前はしなかつたにも関わらず、茶碗・香合・花入・菓子鉢などの茶道具をつくつた。清寧軒焼は、斉順の「単に御慰品」（『南紀徳川史』第十一冊）であつて、大量に生産されたものではなかつたようである。

とはいえ、「尚御遺蔵のもの尠からざりしを維新改革御道具取片付の際御払品となり

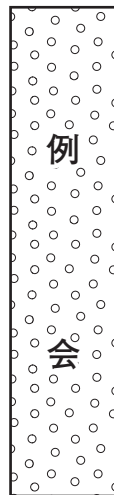
たり」、つまり所蔵していたものが少なからずあつたので、明治になって和歌山城の道具類を片付けたときに、払い下げられている。つまり、売立がおこなわれる以前から、紀州徳川家伝来品の流出ははじまつていたといえよう。

明治に入ると、紀州徳川家当主の興味や関心あるいは趣味は、茶の湯よりも時流に沿つたものに移つて行つた。具体的には、十五代当主頼倫による平城宮跡の発掘支援、十六代頼貞の楽譜や音楽文献、古楽器類の収集などである。紀州徳川家当主は、時代が変わつても芸術家のパトロンであり、自らも収集家と



「大阪毎日新聞」和歌山版
昭和2年4月23日、(縮刷版。左端1行欠)

してあり続けた。芸術や文化に理解を示し、莫大な財産をつぎこむことによって、貴重な文化財の保護や発展につながつたことは間違いないが、その一方で、紀州徳川家伝来のコレクションは、売立により散逸の憂き目にあつた。競売にかけた、頼貞が憎い。



東京例会

(平成三十年二月二十四日)

「日本における『茶経』の受容」

岩間眞知子

陸羽の『茶経』は、日本に何時頃もたらされ、どの分野で認知されたのだろうか。おそらく日本で最初に『茶経』を紹介したのは、鎌倉時代の栄西の『喫茶養生記』であろう。それは宋の類書『太平御覧』の孫引きだが、栄西自ら取捨選択した引用文である。鎌倉時代の医書『万安方』も、宋の『大観本草』所収の『茶経』を孫引きする。金沢・称名寺の『茶経』の一部を記す文書は『喫茶養生記』再治本を写したものだ。こうし

て『喫茶養生記』や平安末以降将来された『太平御覧』を通して『茶経』は知られていったであろう。

『五山文学全集』では七点の文献に、『茶経』や陸羽が見えた。南宋・祖琇の『隆興仏教編年通論』は中国では失われたが、南北朝時代の五山版にあり、そこに陸羽伝が収録され、従来明確でなかった陸羽の卒年を貞元十九年と記す。

夢窓疎石の『夢中問答集』、大休宗休の「明窓宗珠菴主像」賛、西笑承兌の「学問所記」に陸羽や『茶経』が登場する。江戸時代の曹洞宗の卍山道白が立花実山を語った文にも陸羽が引かれる。

鎌倉以降の禅宗に『茶経』への関心が見られるのは、初期禅宗が中国の禅院生活そのものを移入し、生活の基準を茶の類出する『禅苑清規』に仰いだため茶が重視され、また中国文人に憧憬したからであろう。そこで『茶経』も将来され、一六〇〇年代には浄土宗文献でさえも、周知のものとして『茶経』を挙げるまで、世間に認知されるようになったと考える。

「紀州徳川家の菓子木型について

― 徳川治宝・徳川斉順の

菓子木型の比較から ―

鈴木 愛乃

落雁などを作る際に用いられる菓子木型は、独特の造形表現を持つものである。本発表では和歌山市立博物館所蔵の紀州藩十代藩主・徳川治宝と、十一代藩主・斉順御好みの菓子木型の意匠を比較し、その制作背景について考察した。

学問・芸術を好み、茶の湯の庇護者としても知られる治宝御好みの木型を見ると、紀州の地域性を表すものや中国的、博物学的な題材の意匠が多い。菓銘も文学的な意味を持ち、治宝の趣味が反映されている。また題材によって彫りの深さが使い分けられ、表現方法が工夫されている。治宝の周辺では教養ある人物の間で頻繁に菓子が用いられていたため、新たな菓子が次々に考案されたのであろう。

治宝の後を継いだ斉順御好みの木型を見ると、吉祥文や草花など汎用性の高い題材が立体感を抑えて表されている。様々な場に対応できる菓子であることから、藩主としての斉順の政治的な状況が関連していると考えられ

る。以上の比較から、菓子の意匠が文化的背景と個人の意向を反映していることが明らかとなった。

また治宝御好みの木型の意匠には、和歌浦の貝を使った香合の形を意匠に取り入れたものや、和歌浦を名所図絵のように表現しているものがある。紀州徳川家にまつわる題材を、造形作品と同じ表現を用い、高価な砂糖を材料として表していることから、こうした菓子には紀州徳川家の権威を表現する意図があったのと考えられ、治宝が菓子を表現手段の一つとして効果的に用いていたことを指摘した。

東海例会

(平成三十年四月二十一日)

「白酔庵・吉村観阿」

宮武 慶之

吉村観阿（白酔庵／一七六五―一八四八）は江戸時代後期に活躍した町人数寄者で目利きとして、今日でも評価される。しかしこれまで研究があまりなされていなかった。観阿は若い頃、松平治郷（不昧／一七五一―一八一八）と親しくし、不昧没後は新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九―一八五八）と親しくする。

先ず不味との交流では、観阿に「楽中苦
苦中楽」の扁額や、「曲直」(二本入。個人
蔵)を与えている。不味は観阿を寵遇したが、
その理由は観阿の生家山田屋と仙台藩の関
係が大きかったためである。次に溝口家と
の交流で注目すべきは、観阿が多く道具
を取り次いでいることである。そのため同
家旧蔵品には優品が多く、観阿の箱墨書が
多々みられる。

不味、翠濤との交流から、これまで明ら
かにされていなかった観阿の活動を明らか
にした。さらに当日は妻観勢(田鶴)と息
子である弥山(信軸)、七代目市川團十郎
(一七九一—一八五九)、原羊遊齋(一七六八
—一八四五)と中山胡民(一八七〇没)と
の関係についても紹介した。

近畿例会

(平成三十年五月十二日)

「抹茶の『おいしさ』の解明」

耕三寺華蓮

今日、茶道人口は減少しつつあり、茶道
流派の存続が危ぶまれている。若者はなぜ
茶道を敬遠しているのか。その理由を調べ、
打開策を見出すことで、茶道の継承に少し

でも貢献できればと考え研究を進めた。

事前調査として大学生にアンケートを行
い、その結果から本研究では味について取
り上げ、若者が「おいしい」と感じる抹茶
はどんな抹茶かを調べた。

同志社大学の学生四十二名、龍谷大学の
学生(藪内流)十二名に、五種類の抹茶に
対してその味の評価を回答してもらった。
五種類の抹茶とは、薄茶用抹茶一グラム・
薄茶用抹茶二グラム・濃茶用抹茶一グラム・
濃茶用抹茶二グラム・薄茶用抹茶と濃茶用
抹茶を同量ずつ混合した一、五グラムで点て
たものである。

因子分析の結果から、抹茶の評価には、
飲みやすさだけではなく、抹茶特有の渋み
も必要であると考えられる。また、官能分
析の結果では、茶道の経験の有無で抹茶の
評価は異なっていた。あまり抹茶を飲みな
れていない人にとって、抹茶は上品で味わ
い深いというイメージが存在し、飲みやす
さだけでなく期待された渋みのある抹茶が
高く評価されたと考えられる。

本研究の結果から、茶道未経験者に抹茶
を振る舞う際、薄茶用抹茶と濃茶用抹茶を
同量ずつ混合した一、五グラムで点てた抹茶

を出すことを提案する。重要なのは相手の
好みや要望に臨機応変に対応することであ
る。そうすることで相手に抹茶やその時間
を楽しんでもらい、その楽しみが今後の日
本文化の継承につながることを期待する。

参考文献

『宇治抹茶問屋四代目が教えるお抹茶のすべ
つ』桑原秀樹(2015)
『藪内家の茶風』公益財団法人藪内燕庵
〔藪内家の茶〕: <http://www.yabunouchi-ennanor.jp/>

『平成27年度伝統的生活文化実態調査事業報
告書』文化庁文化財部(2016)〔文化庁〕:
<http://www.bunkago.jp/index.html>



東京例会

平成三十年七月二十八日(土) 午後二時

(会場: 五島美術館)

「わかもと製菓創立者・長尾欽弥の茶の湯
― 新出史料「宜春亭記」より ―

岡 宏憲

「表具裂から考える」

徐熙筆鷺絵の伝来と影響(仮)

佐藤 留美

平成三十年九月二十九日(土) 午後二時

(会場:五島美術館)

「売立目録にみる薩摩茶入」

「大名屋敷の宴会と茶の湯」

松村真希子
追川 吉生

平成三十一年二月十六日(土) 午後二時

(会場:根津美術館)

「立花有得と福岡の南坊流」

「室町殿行幸御飾記」について(仮)

篠原佐和子
松本紗代子

東海例会

平成三十年九月二十二日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「尾張徳川家と遠州」

深谷 信子

平成三十年十一月二十四日(土) 午後二時

(会場:名古屋文化短期大学)

「尾張のやきもの」

浜松会場 未定

前田 博

金沢例会

平成三十年七月一日(日) 午後一時半

(会場:ITビジネスプラザ武蔵)

五階第一研修室

「名物釜」

竹内 順一

平成三十年九月十七日(月・祝日)

移動例会

日程:七時五十分集合、八時専用バスにて

出発、十三時五分講義

場所:野村美術館及び京都方面

(拇尾・高山寺ほか)

「展示品解説」

解説:野村美術館 谷 晃館長

平成三十年九月三十日(日)

九時半〜午後三時半頃終了

(会場:金沢・湯涌温泉江戸村)

「江戸村 初秋の茶会」

平成三十年十一月四日(日) 午後一時半

(会場:ITビジネスプラザ武蔵)

五階第一研修室(予定)

「茶壺について」

竹内 順一

平成三十一年三月十日(日) 午後一時半

「未定」

北陸例会

平成三十年九月十五日(土) 午後二時

(会場:越前古窯博物館)

「未定」

高知例会

平成三十年六月二十四日(日) 十時〜正午

(会場:高知県立文学館 慶雲庵茶室)

「茶の湯文化学会三十年大会の研究発表
をテーマとしたシンポジウム」

発表者 未定

軽食茶事 十二時〜十六時

席主 三名

会費 千円

平成三十年九月二日(日) 十時〜正午

(会場:高知県立文学館 慶雲庵茶室)

文献研究「未定」 発表者 未定

平成三十年十二月二日(日) 十時〜正午

(会場:湯川温泉)

「茶の湯関係文献を読み所感の発表」

発表者 未定

茶事 十二時～十六時

席主 四名

会費 五千円

平成三十一年二月三日(日) 十時～正午

(会場) 高知県立文学館 慶雲庵茶室

「高知支部三十一年度事業計画」

発表者 未定

茶席 十時～十六時

茶の湯文化学会の研究成果を実践する。

茶の湯を一般の方々に親しんでもらうため

「床飾り」「道具立て」はするが、点前は客次第として楽しめる茶席を設ける。

会費 三百円



新刊案内

* 『茶道建国(MT MJ) 日本らしさと茶道』

クリステン・スーラック著 廣田吉崇監訳

井上治・黒川星子翻訳 さいはて社(定価

二、七〇〇円+税)

外国人のお弟子さんは、こう見た。日本、

茶道、家元、師匠……。はたして茶道とは、文化ナシヨナリズムなのか？

* 『茶人叢書 松平不昧 名物に懸けた大名茶人』 木塚久仁子著 宮帯出版社(三、二〇〇円+税)

茶器を集大成した生涯。松江藩十九万石の藩主となった若き不昧(治郷)の茶書から、膨大なコレクションを分類・格付けした『古今名物類聚』に至るまでを考察し、その実像に迫る。

* 『茶人叢書 小林逸翁 一三翁の独創の茶』 齋藤康彦著 宮帯出版社(定価三、五〇〇円+税)

物云う数寄者の「新茶道」。「今太閤」とも呼ばれた近代実業家が提唱した新しい茶道とは？

* 『松下幸之助 茶人・哲学者として』 谷口全平・徳田樹彦著 宮帯出版社(定価二、三〇〇円+税)

経営者として多忙な日々を送る中、自らの哲学を貫き、社会活動や出版事業に邁進した松下幸之助。彼にとって茶湯は、求道の一環であり、また忙中閑とでもいふべき安らぎをもたらすものであった。

※年会費未納の方は、至急お払込み下さいませよう、よろしく願いいたします。
※しばらくの間、新たな「投稿文」の受付を止めさせていただきます。よろしくお願ひ申し上げます。

